

# 夜明け前の今、私達がしなければならないこと

施設長 片山 泰伸

『措置制度』から『支援費制度』に変わり、一年が経過しようとしています。私自身が特にこだわりをメンバーに抱いてしまうのは、彼等との『コミュニケーション』について、私達がどの様に考えてきたかという事と、どれだけ彼等との『コミュニケーション』に努めようとしてきたか。一方通行に終えることではなく、キャッチボールに努めてきたか。あるいは、伝えようとしてきたか。聴こうとしてきたか。そこを安易に通り過ぎてしまっていたのではないかという汚点に気づいたからです。

彼らの意志・能力を決して私達に近づけるのではなく、彼らのもつ意志・能力を支援しながら育み育て、社会参加と自己実現に繋げられたか。それ以上に、人としての誇りを感じる関わりを行ってきたか。社会に対して、『伝える』それも『丁寧に伝えていく』という作業です。残念ながら『NO』と応えざるを得ない私があります。

『措置制度』から半世紀、やっとメンバーが、自分を主人公に生きていける時代が来ました。制度（公が知的障害を抱えざるを得なくなった人達のライフステージに、『私』を主語に生きることを支援していく約束）が、彼らの人生を応援すると明言しているという事です。

でも早くも、その夢・灯火が、暗礁に乗り上げています。財源がないという問題です。折角『夜明け前』を迎える事が出来るように制度化されたものがです。いったい何が課題なのでしょう。愛成学園で生活されている人達の施設での暮らしは、平均30年以上になります。自分が、最初に出会った施設は幼稚園でした。もし、私がそのまま幼稚園での生活がずっと続いていたら…。試験日が、本人の理由ではなく他の都合で延び延びになったら。施設で暮らすメンバーの気持ちは、きっとそういうものではないかと思います。しかし、地域にそういう基盤がなかったら仕方がないことか。諦めるか。諦めないか。人が大切にされる文化を築いていくという事は、そこが問われているのではないかと思います。『自覚者は責任者である。』重いけど。

娘達に話します。「義務教育の間にあなた達の知らない人があなた達のために払ってくれる税金は、1,000万円をきっと超える額だよ。」その時、娘達は驚きます。謙虚さ・感謝・一人では生きてはいけない。そういうことを考えて欲しいと伝えます。でも、これも戦争がない期間が続いているからです。

「じゃあ、その1,000万円を超える額がこれからも友達に支払われ続ける世の中にしていくためには何が大切。」そう尋ねます。「人が大切にされる国・街。」私達の働きの中には、利用者と共にそういった文化を育み育てていくという大きな意味があると思います。

人が大切にされる「夜明け前」の出発は、前途多難ですが。編集委員の方から、「この1年を振り返って」というテーマで書く様に言われました。彼らの「夜明け」であったはずなのに。逆戻りしないように、踏ん張り時でしょう。でも、先の見えない時はどれくらい続くのでしょうか。頭で理解するのではなく、胸に落ちる体験を積み上げたい。支えはそこ。

2004. 4

